第３章　古墳の概要

1　既往の調査

発掘報告によると昭和 32 年（1957）の夏ごろ五條猫塚古墳の開墾により多数の遺物が出土した。同年 10 月 29 日に後藤守一氏、網干善教氏らが現地を訪れ、それらの出土遺物を実見し、翌 11 月にかけて奈良県教育委員会への出土遺物の移管手続きや発掘調査計画の立案がなされた。五條猫塚古墳の正式な発掘調査は翌昭和 33 年（1958）３月 21 日から４月７日までの 18 日間に渡っておこなわれた。発掘調査には発掘報告の編著者でもある網干善教氏に加えて、島田暁氏、樋口昌徳氏、溝部文昭氏、矢部真美氏らが参加し、末永雅雄氏、北野耕平氏、森浩一氏らも発掘調査中に現地を訪れたようである。

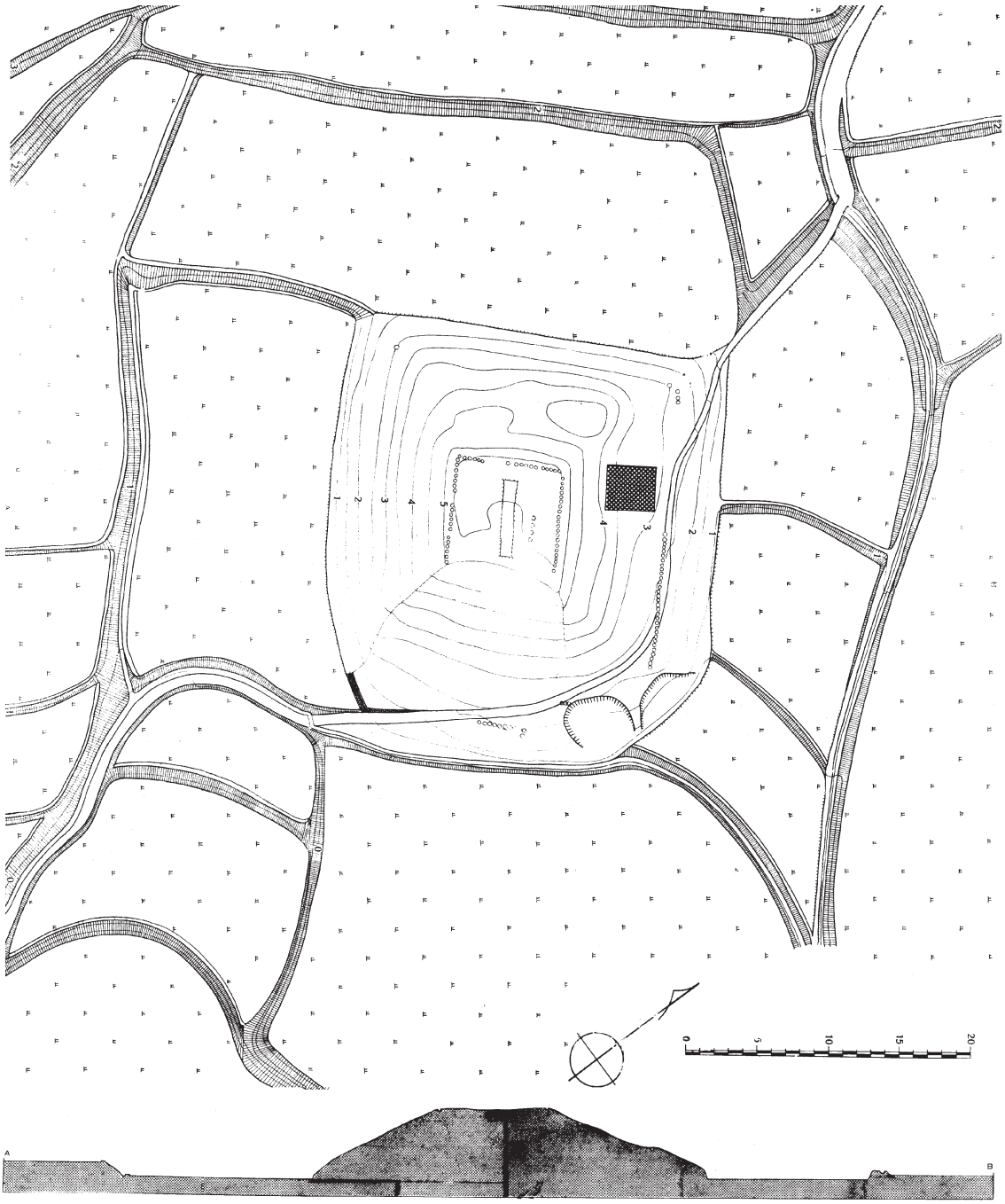
発掘調査は３月 21 日に墳頂部中央の竪穴式石槨から進められた。石槨中央部の攪乱部分の調査から着手し、始めに南東側に向けて調査を進めたようである。24 日には石槨南東部で眉庇付冑や埴製枕、短甲片などを検出。その後、南東部の遺物の検出が終了したのち、北西側へと調査を進め、25 日には石槨北西部で銅鏡や頸甲、鉄鉾、短甲片などを検出している。このころには墳丘の調査もかなり進展していたようで、墳丘裾では円筒埴輪列を、墳丘斜面では葺石を検出している。28 日には石槨東側の４個体の円筒埴輪の下部の調査に着手し、小札甲１領を検出している。29 日には石槨内出土遺物の記録・取り上げ作業が完了した。30 日には石槨外の調査を進め、埴輪下で鉄鏃群や三葉文銙帯金具などを検出している。31 日から４月１日にかけては、石槨外の遺物出土地点周囲の調査を進めるがそれ以上の遺物の出土はみられず、翌２日には石槨の実測、３日には墳頂部の写真撮影がおこなわれ、埋め戻しに着手している。４日から６日にかけて、埋め戻しや出土遺物の整理作業がおこなわれ、７日には現地での全ての作業が完了した。以上のように昭和 33 年におこなわれた発掘調査においては、限られた期間内の調査にもかかわらず、墳丘・埋葬施設ともに詳細な出土状況図や遺構の記録が残されており、大いに参照できる（第２・５・６図）。

発掘調査ののち、五條猫塚古墳はその豊富な出土品によって広く知られるところとなったが、墳丘本体は地元の方々により手入れがなされ、雑木が生えることもなく発掘調査当時のまま残されることになったとされる。平成２年（1990）には京奈和自動車道および県道五條・富田林線の建設にともなって近在する堂城山古墳の発掘調査が奈良県立橿原考古学研究所によっておこなわれたが、それにともなって五條猫塚古墳についても墳丘の測量調査がおこなわれた（第３図）〔坂 1991〕。　　（川畑　純）

2　墳丘の形態と構造

周囲の地形と墳丘の関係　五條猫塚古墳は向山丘陵の西端部と墳丘西側に位置する低丘陵に挟まれた谷地形の中にあり、墳丘東側には向山丘陵の西麓が迫ってきている。この谷地形は、北西から南東へと傾斜しており、墳丘周辺は向山丘陵に近接する影響もあり、北側の標高が南側に比べて高い。詳細な断ち割り調査がおこなわれていないため墳丘の構築方法は不明であるが、発掘報告では墳丘周辺の北西と

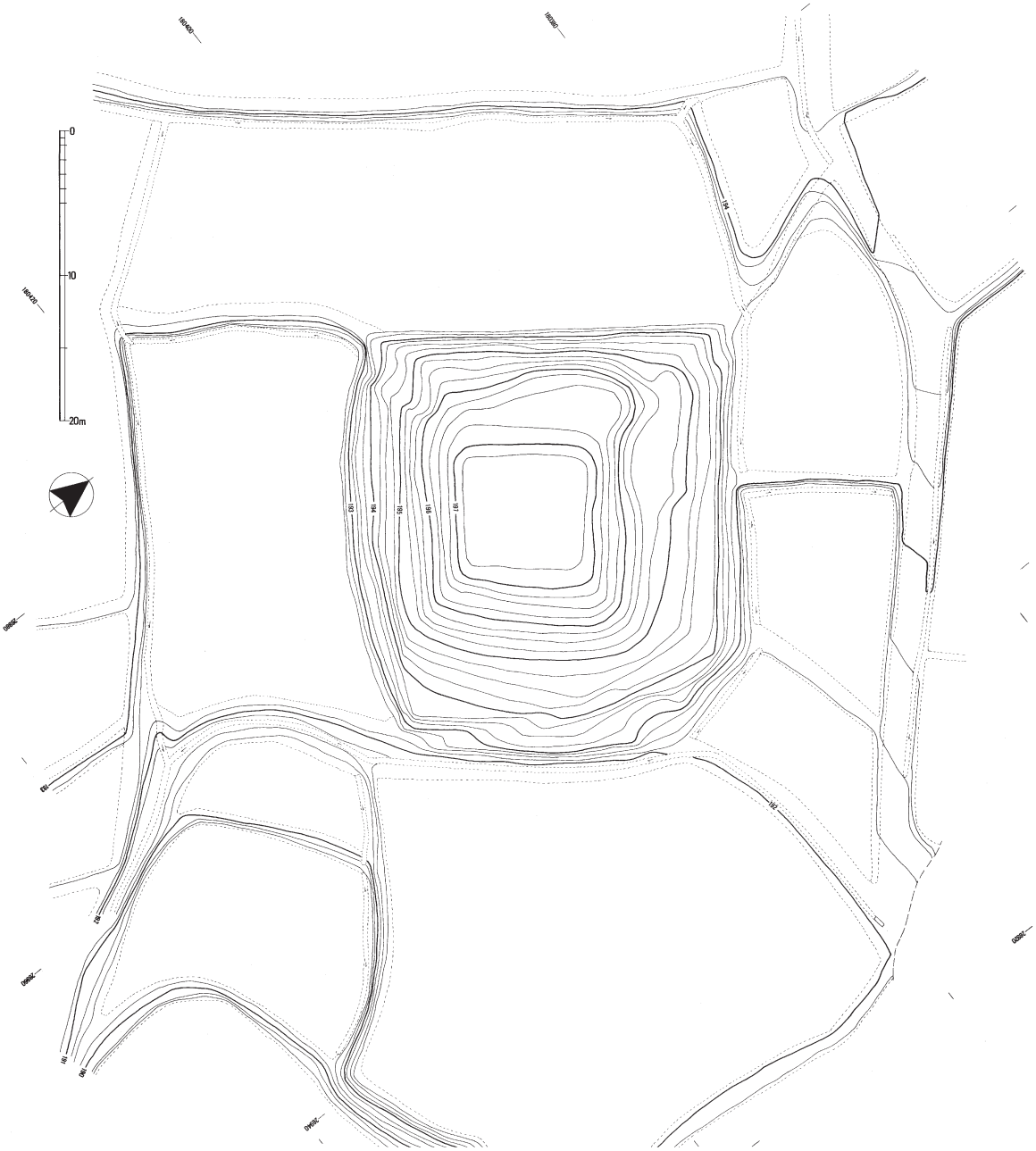
2　墳丘の形態と構造



第２図　五條猫塚古墳実測図（〔網干 1962〕より改変転載）

南西側に掘割の痕跡が確認できるとされており、周囲の地形を考慮すると、谷部の傾斜地の一部を溝状に掘削して切断し、一部に盛土をほどこすことで墳丘を構築した可能性が考えられる。

外　　形　墳丘の向きは墳丘隅角の対角線が正方位に一致または直交する方位である。現状での墳丘裾と考えられる傾斜変換点の標高は、北東辺で 192.5 ～ 193.25m、北西辺で 193.5m、南東辺で 192.0 ～ 192.5m、南西辺で 192.5m である。墳丘裾の標高は 192.0 ～ 193.5m とみられ、東側よりも西側が最大で 1 .5m ほど低くなっている。そのラインで、現状の墳丘外形の規模を測ると、おおむね 26.0 ×



第３図　五條猫塚古墳測量図（〔坂 1991〕より改変転載）

28.0mの長方形となる。ただし、南東辺の墳丘裾付近にみられるコンターラインの乱れを、墳丘が崩れて流出した結果と考えれば南東辺の墳丘裾は現状よりもやや中側に入ると考えられる。

発掘報告では、墳丘の外形は、南東辺・北西辺約 27.4m、南西辺・北東辺約 30.3m、高さ約 5.25m の長方形墳とされる。墳丘の残存状況は、築造当時より裾廻りが多少削られて外形が小さくなっている以外は著しい変形はみられないとし、その中でも特に北東隅は墳丘の崩れが激しいとされる。それに対して、測量報告では、測量図にみられる墳丘裾の位置は後世に埋没したもので、改変を受けている可能性が高いと判断している。その上で墳丘規模については、墳丘東側の一部が旧状をある程度保っていると仮定して、1 辺 32.0m、現状での高さ 4.0m の方墳として復元している。

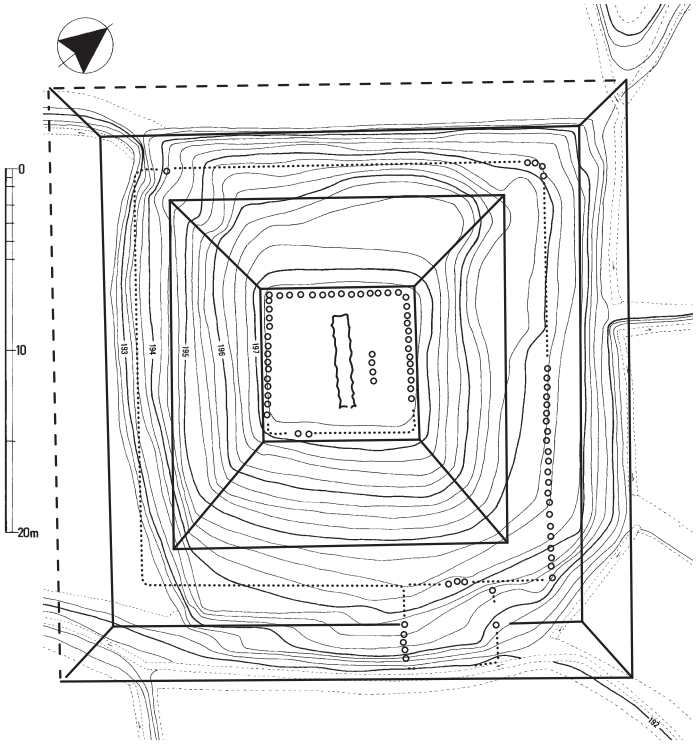
周　　濠　周濠部分の発掘調査はおこなわれていないが、発掘報告では周濠の存在が想定されている。その根拠として、古墳の立地が周囲に丘陵を持つ谷地形であり水利に関して最適であること、墳丘周囲の地形の観察から墳丘築造時の切断掘割に周濠状の痕跡が認められることなどをあげている。

段　　築　段築の有無については、測量図の観察とともに、発掘調査によって検出された埴輪列の位置から検討されている。原位置を保った状態で検出された埴輪は、墳頂部周縁のものと墳丘斜面の下部周辺のものに分けられる。墳頂部周縁の埴輪列は、各辺ともに 23 個体存在したと推測されており、対面する北東辺と南西辺の距離は約 7.5m である。

墳頂部よりも下部では、南東辺の中央部で 10 個体、東端付近で 3 個体の埴輪列を検出している。ただし、それぞれの埴輪列の底部の標高は約 55㎝異なり、埴輪列がどのように接続していたのかは不明としつつも、それぞれが一連の列を形成していた可能性と、墳丘裾付近とその上部に埴輪列が二重に巡っていた可能性が提示されている。

それ以外の調査区で検出された埴輪列の底部の標高も比較されており、北東辺で検出された埴輪列では、東端の個体よりも、北端の個体の方が 13㎝高く、その北隅の個体よりも西隅で検出された個体はさらに 51㎝高いと報告されている。

このように、発掘報告では、北東辺から西隅までの埴輪列については墳丘裾を巡る一連の埴輪列と判断しており、段築の存在については触れていない。対して測量報告では、北東辺の埴輪列の下方に斜面が存在することから、それらの埴輪列は段築の平坦面上に置かれたものとしており、平坦面の規模は幅約 3 ～ 4 m、埴輪列は平坦面のほぼ中央に位置すると復元している（第 4 図）。ただし、そのように平坦面の幅を想定すると、南東辺で検出された二重の埴輪列が同じ平坦面上に存在することとなり、両者に約 50㎝もの標高差があることと矛盾する。南東辺下方の埴輪列を墳丘裾を巡る埴輪列と想定し、墳丘裾から平坦面までの斜面は比較的短く低いものとして復元するのも一案であろう。



第 4 図　五條猫塚古墳復元図（〔坂 1991〕より作成）

また、平坦面上の各辺の埴輪列は、先述のように各々数十㎝の標高差があることから、墳丘自体が北西から南東に傾斜していると考えられる。そのため、段築や墳丘裾の位置の復元にあたっては、段築と墳丘裾の幅や標高が各辺で若干異なる可能性を考慮する必要がある。

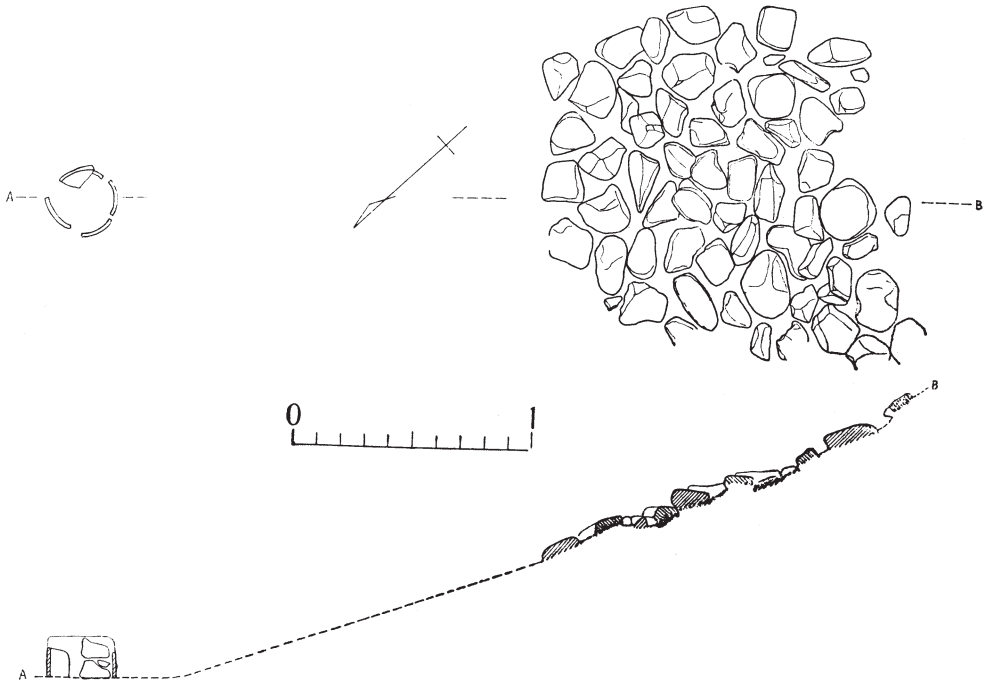
墳 頂 部　墳頂部平坦面の規模については、墳頂部の埴輪列は墳頂部平坦面の周縁近くに樹立されていた

とみられ、先述した埴輪列どうしの距離が一つの目安になる。測量報告では墳頂部平坦面の規模は１辺約８ｍと推定している。

葺　　石　北東辺と南東辺の２箇所で墳丘斜面の構造を確認するためのトレンチ発掘調査がおこなわれている。南東辺の調査は、記述や図面はなく、写真のみが発掘報告に掲載されており、詳細は不明である。また、埴輪列と墳丘裾の間の小斜面は調査がおこなわれておらず、葺石の有無は不明である。

北東辺の調査では、埴輪列から約 25㎝内側で斜面裾となり、そこから約 1.6 ｍ上方で葺石が検出されている（第５図）。そのため、葺石は斜面の中腹にのみ葺かれていたとされている。また、斜面の勾配は仰角 22 度で、そのままの勾配では墳頂部周縁の傾斜変換点と接続しない。そのため、墳丘斜面の傾斜が中腹あたりで変化し、急になる可能性も指摘されている。

発掘報告で指摘されたように、墳丘斜面の傾斜が途中で変化している可能性がある一方で、検出された葺石と埴輪列との間の部分についても、明確な基底石がみられない点から、斜面の立ち上がり始めの部分まで葺石が存在したが、後世の攪乱により削平されてしまった可能性も想定できる。一方で、測量報告で想定されたように、墳丘を二段築成と考えるのならば、上段の斜面にのみ葺石が施工されていたことになるが、墳丘斜面の上半にのみ葺石が施工されていたとする発掘報告の記載との整合性が問題となる。あるいは三段築成の古墳と想定した上で最上段の斜面にのみ葺石が施工されており、埴輪の標高差を上段と下段の平坦面の標高差に由来するものと考えるのも一案であろうか。その場合にも南東側で検出された埴輪列のうち、東端のものが南東側へのびるかのように二重に配置されていた点など、埴輪の配置方式にも不明な点が多く残る。このように、墳丘の形態と構造については確定できない部分も多く、今後の発掘調査などによる墳丘形態の詳細な検討が必要である。　（藤原光平）



第５図　墳丘東北側葺石出土状態実測図（単位米）（〔網干 1962〕より転載）

３　埋葬施設の構造

（１）発掘報告による所見

墳頂部の中心には竪穴式石槨が設置される（第６図）。主軸は北西―南東で埴製枕の出土状態から北西側が頭位と考えられる。墳頂部周縁の埴輪列とともに石槨の主軸は墳丘に揃うため、石槨の主軸方向は方位方角ではなく、方墳という墳丘の形態と軸の決定にしたがう形で決定されたことがわかる。

石槨の全長は 5.17 m。幅は東南部で 73㎝、中央部で 77㎝、北西部で 89㎝と北西部に向かって幅広になっており、埴製枕の向きによる想定と同様に北西側が頭位であったことを示唆する。残存部の高さは南東部で 93㎝、北西部で 90㎝である。石槨の中心部は盗掘を受けており、南西部と北東部の側石はうしなわれている箇所も多い。蓋石は検出されていないためその構造は不明である。

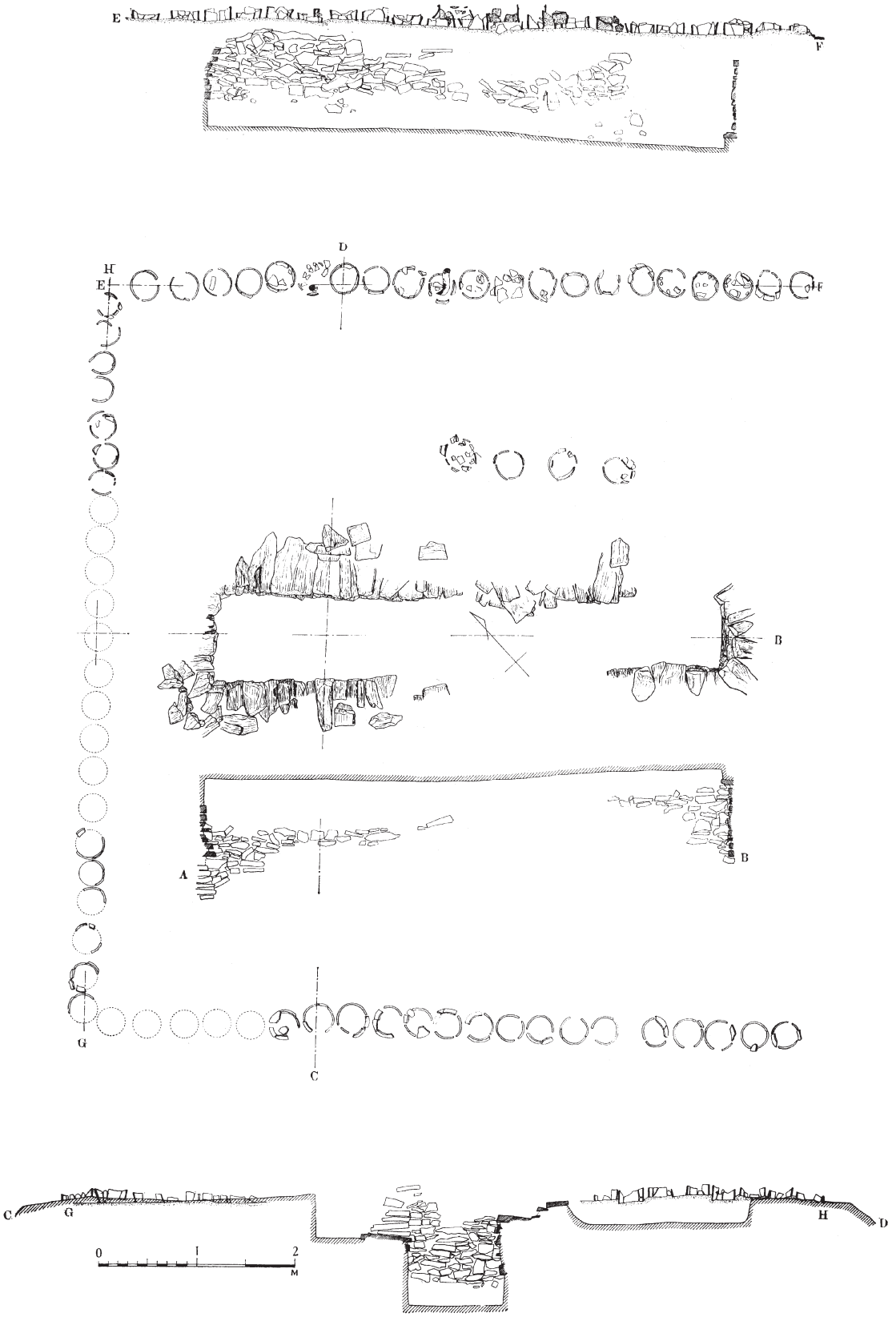
石槨の石材は緑泥片岩かそれと同系統のものとされ、小口積みで構築される。側石はうしなわれた箇所が多いが、南東部の側石最下段の板石は上方の側石よりも約 10㎝内側に突出する。こうした構造は北西部の側石にはみられない。石槨の床面はほぼ平坦で、粘土床のような施設は確認されず、棺の構造に関する情報は残っていなかった。ただし、床面がほぼ平坦なことや、底部が平坦な埴製枕が用いられていることから、棺底が丸くなる割竹形木棺などは想定できず、箱形木棺などが想定できる。なお、発掘報告の写真による限り、石槨には顕著な控え積みなどもなされていないようである。

石槨の北東約 1.1 mの位置には、円筒埴輪が約 25㎝間隔で 4 個体設置される。それらの埴輪のうち北端のものも石槨の中心より僅かに北側にある程度で、埴輪列は石槨の中心よりも南東側に配置される。埴輪列の軸は石槨の主軸にほぼ揃うかやや東側に傾く。埴輪列の下からは多数の遺物が出土しており、もっとも南東側の埴輪よりもさらに南東側は発掘調査以前の開墾により多数の遺物が出土した位置に該当する。これら 4 個体の埴輪の下に副葬品が埋納されていたことから、埴輪列は攪乱を受けた範囲である東南側にさらに続いており、副葬品が埋納された位置を表示していたものと考えられている。

（２）調査前出土遺物の概要と配置状況の復元

開墾による不時発見の遺物の出土状況については聞き取り調査がなされており、その概要が発掘報告に記されている。それによると、南東側から掘削を進めたところ、はじめに銛が２点重なって出土し、さらに蒙古鉢形眉庇付冑（冑３）が出土した。さらに北西側には砥石が並んであり、さらにその北西側には鉄鏃約 320 点が一括して置かれていた。さらに続いて小札甲が 1 領分と、その北西に環頭剣が環頭部を南東側にして東西に置かれていたとされる。工具についてもほかの遺物とともに出土しているが、詳細な出土位置は記憶されておらず、砥石から鉄鏃の付近にまとめて配置されていたとされる。これらの遺物が出土した範囲は東西約２m、南北約１mの範囲とされており、環頭剣よりも西側には掘削は及んでいないとされている。

発掘調査以前の出土遺物と発掘調査時の埴輪下出土遺物は、発掘報告では一連のものとされており、あわせて竪穴式石槨外出土遺物として理解されている。一方で、石槨外から出土した遺物が収められていた施設の性格や構造については、発掘報告には特に言及はなく、その上に据えられた円筒埴輪については「副葬遺物標識のために樹立されたもの」として評価されている。そのほかに発掘報告に記載され



第６図　石室及埴輪列実測図（〔網干 1962〕より転載）

た情報としては、埴輪下で検出された鉄鏃は埴輪の下約 10㎝というごく浅い位置から出土したとされる点が注目できる。これは墳頂部に埋設された施設の深さとしてはいちじるしく浅いといえ、施設の性格を考える上で注意する必要がある。なお、写真図版による限り石槨の北東側の４個体の円筒埴輪の標高と墳頂部周縁の円筒埴輪列の標高はほぼ同じとみられる。また、石槨の実測図では、石槨北西側小口部分の石材遺存部分の標高も墳頂部周縁の円筒埴輪列の基底部の標高とほぼ同じであり、蓋石などの構築材の存在を想定すれば、石槨外の副葬品と同じく、石槨は表土直下のような非常に浅い位置に設置されたことになる。あるいは、墳頂平坦面の中央部分にはさらに盛土がなされていたのかもしれない。

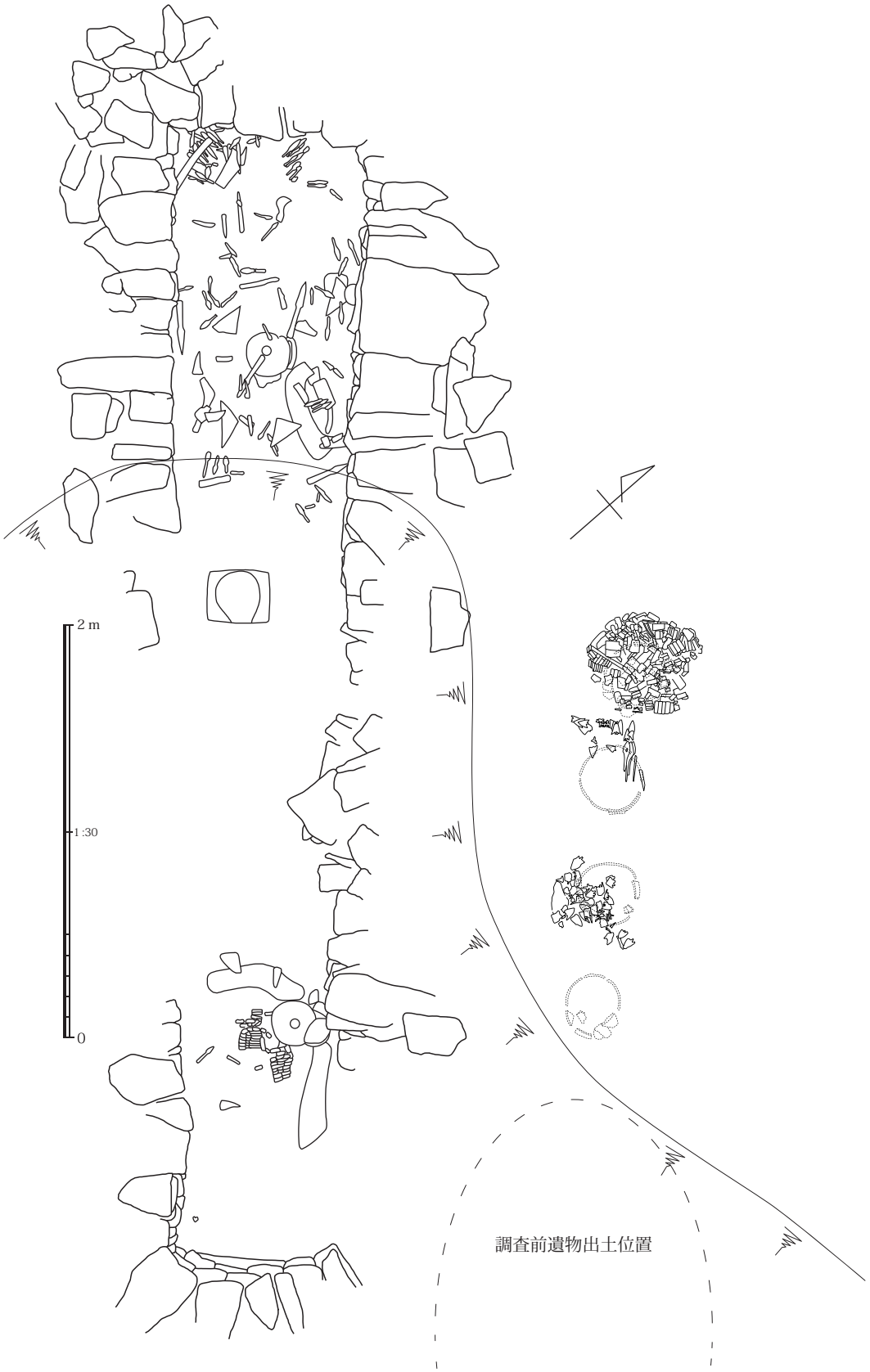
（３）石槨外の施設の評価

竪穴式石槨外から出土した遺物がどのような施設に収められていたのかは、石槨に近接して多数の遺物が出土した状況から、石槨に併設された副葬品専用の埋納施設の可能性が想定できる。先述の通り、遺物が非常に浅い箇所から出土したとする報告は、墓壙掘方を共有し石槨の埋設や葬送儀礼のある段階で石槨外に副葬品が配置された可能性を示唆する。しかし、鉄鏃のほかにも小札甲１領分とされる小札群や蒙古鉢形眉庇付冑などが出土しており、発掘調査前のものも含めて石槨外からの出土品すべてが非常に浅い位置に埋納されたと想定できるかどうかは検討が必要である。あるいは、小札甲と鉄鏃群の間が空くことから石槨外出土遺物は一連で埋納されたのではなく、複数の箇所に別々に埋納された可能性も想定できよう。なお、石槨に併設された埋納施設と考えた場合にも、石槨と掘方を共有して一連で埋納されたものであるのか､それとも石槨の埋設完了後､新たに墳頂部から掘り込まれた別個の施設であったのかについてはまた別の検討が必要である。

発掘報告に掲載された竪穴式石槨と埴輪列の出土状況図、および石槨内と埴輪下の遺物の出土状況図、墳丘の実測図をもとに石槨内・石槨外の遺物の出土状況を復元したものが第７図である。聞き取り調査の結果をどの程度信頼してよいかについては判断が難しいが、小札甲や矢柄を装着していたであろう細根系鉄鏃が一括して副葬された状況、砥石や眉庇付冑、銛といった比較的大型の器物も出土したことを考えれば、東西２ｍ、南北１ｍ（発掘報告では図上方を「西」として記載している）という範囲から遺物が出土したとする記載はおおむね納得のいくものである。

ただし、そのように出土範囲を想定し、発掘報告の墳丘実測図に記された攪乱の範囲を示すとみられる線から南東側で出土位置を復元すると、遺物出土位置の南東端は石槨の南東小口の位置を１ｍ近く越えて南東側へと及ぶことになる。なお、攪乱部分から南東へ２ｍのばした場合、遺物の出土想定位置の端は南東辺の墳頂部周縁の埴輪列想定位置にかなり近づく。この埴輪列に近すぎる点から、出土位置復元の範囲が間違っているとみることもできるし、埴輪列の直近ぎりぎりまで遺物が埋納されたとみることもできるため、評価は難しい。少なくとも、２ｍ×１ｍという聞き取り調査から復元された出土範囲は、墳頂部の範囲をいちじるしく逸脱するものではなく、想定として矛盾がないことだけは確認できる。

また、石槨と埴輪列（およびその下の埋納遺物）の主軸の僅かなずれについても、発掘調査で出土した遺物の範囲だけならばまだしも、遺存する埴輪列よりも南東側に続くことを考えれば、やや大きなずれとして注意される。ただし、この埴輪の軸のずれについては、墳頂部に据えられた埴輪にも僅かに蛇行する箇所があるなど、どの程度積極的に評価してよいかは問題が残る。また、発掘調査以前に出土し



第７図　五條猫塚古墳遺物出土状況図（〔網干 1962〕をもとに作成）

た遺物については、発掘調査で埴輪下から出土した遺物と軸を揃えて一連で並ぶのかどうかも不明である。あるいは想定よりも東側に傾き、全体として石槨の主軸と揃うように並ぶのかもしれない。

以上のように、今回新たに発掘報告の記載を前提に作成した図の検討により、石槨外出土遺物が収められた施設には、石槨に併設された副葬品の埋納施設としてはやや理解しがたい状況も何点かあることが判明した。それは先述の通り、埴輪列とその下に収められた遺物の主軸が石槨の主軸と僅かだがずれる点、遺物の出土位置の南東端が石槨の南東小口の位置を大きく越えてしまう点である。これら２点は石槨外出土遺物が石槨の埋設と一連の過程で計画的になされたとする理解にやや反する。石槨が墳頂部の中心に設置される一方で、石槨外の副葬品が石槨の設置時には埋納がまったく想定されていないかのような位置にあることも、石槨と同一墓壙で計画的に配置されたとする想定に反するといえる。

このように、発掘報告に記載された聞き取り調査を最大限に評価して復元すると、石槨に併設された埋納施設という評価だけではなく、別個の独立した施設としての可能性も浮上する。その場合には、石槨の構築と埋戻し後に、改めて掘り込まれて埋設された施設である可能性も想定できよう。ただし、その場合にも人体埋葬が想定できる十分な空間を認めてよいのかどうかについてはさらなる検討が必要であり、埋納施設であったのか、埋葬施設であったのかは確定できない。

五條猫塚古墳の構築過程を考えると、造墓契機となったであろう中心埋葬施設は竪穴式石槨で間違いないが、石槨外出土遺物が収められていた施設については現状からはその性格は確定できず、複数の可能性が想定できる。それは単純化すれば、「石槨と同一墓壙に設置されたもの／石槨とは別の掘り込みによるもの」と「人体埋葬のある埋葬施設／人体埋葬のない埋納施設」という組み合わせの４パターンとして考えられる。いずれの可能性が高いかについては、これまでに述べたような確定的な情報や想定では判断が難しい。また、同一墓壙に設置された埋納施設と、別の掘り込みによる埋葬施設とでは、出土品の評価のみならず、五條猫塚古墳の評価にかなり大きな違いが出てくるであろうから、軽々に判断もできない。出土遺物の精査や発掘報告の精読に加え、今後の発掘調査の進展によって将来的に確定できることを望むとともに、重要な課題として指摘しておきたい。　（川畑　純）

＜参考文献＞

坂　靖　　1991 『近内古墳群』奈良県文化財調査報告書第 62 集　奈良県立橿原考古学研究所

第８図　現在の五條猫塚古墳（左：北西から、右：北から）

五條猫塚古墳の研究

報告編

発行年月日　2014（平成 26）年 3 月 31 日

発　　行　奈良国立博物館
〒 630-8213　奈良市登大路町 50 番地
TEL　０７４２－２２－７７７１

印　　刷　株式会社　天理時報社
〒 632-0083　天理市稲葉町 80 番地